平成 19 年 8 月 24 日

第 25 回農薬専門調査会幹事会審議農薬の概要

1. オキサジアルギル

(1) 用途

除草剤

(2) 審議の経緯

農薬取締法に基づく適用拡大申請（水稻）に係り、平成 15 年 11 月 17 日付けで厚生労働大臣より意見聴取され、第 11 回総合評価第二部会において A D I が決定した。

また、農林水産省から厚生労働省に魚介類に対する基準設定依頼もなされている。

(3) 評価の概要

発がん性試験では、マウスで肝細胞腫瘍の増加が認められたが、遺伝毒性試験の結果よりオキサジアルギルに遺伝毒性はないものと判断されたことから、本剤の評価にあたり閾値を設定することは可能であると考えられた。

各試験の無毒性量の最小値は、ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験の 0.8 mg/kg 体重/日であったことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.008 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量（ADI）とした。

2. クロマフェノジド

(1) 用途

殺虫剤

(2) 審議の経緯

平成 15 年 7 月 1 日に厚生労働大臣より、清涼飲料水の規格基準改正に係る食品健康影響評価について意見聴取がなされ、その後、農薬取締法に基づく適用拡大申請（茶）に係り、平成 17 年 11 月 8 日付けで厚生労働大臣より意見聴取された。

また、いわゆるポジティブリスト制度導入に伴う暫定基準値が設定されており、平成 18 年 7 月 18 日に厚生労働大臣より意見聴取をされ、第 10 回総合評価第一部会において A D I が決定した。

(3) 評価の概要

ペンチオピラド投与による影響は主に肝臓に認められた。

発がん性試験において、ラットで甲状腺濾胞細胞腺腫、マウスで肝細胞腺腫の発生頻度の増加がみられたが、「各種遺伝毒性試験」及び「肝薬物代謝酵素誘導及び細胞増殖能試験」の結果から、発生機序は遺伝毒性メカニズムとは考え難いことから、本剤の評価に当り閾値を設定することは可能であると考えられた。

各試験の無毒性量の最小値は、イヌを用いた 1 年間慢性毒性試験の 8.10

mg/kg 体重/日であったので、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.081 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量 (ADI) と設定した。

3. メトキシフェノジド

(1) 用途

殺虫剤

(2) 審議の経緯

農薬取締法に基づく適用拡大申請 (キャベツ、レタス及びたまねぎ) があり、平成 19 年 5 月 22 日付けで厚生労働大臣より意見聴取され、第 13 回総合評価第一部会において ADI が決定した。

(3) 評価の概要

ペンチオピラド投与による影響は主に肝臓に認められた。

発がん性試験において、ラットで甲状腺濾胞細胞腺腫、マウスで肝細胞腺腫の発生頻度の増加がみられたが、「各種遺伝毒性試験」及び「肝薬物代謝酵素誘導及び細胞増殖能試験」の結果から、発生機序は遺伝毒性メカニズムとは考え難いことから、本剤の評価に当り閾値を設定することは可能であると考えられた。

各試験の無毒性量の最小値は、イヌを用いた 1 年間慢性毒性試験の 8.10 mg/kg 体重/日であったので、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.081 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量 (ADI) と設定した。